

東亞醫學

東亞醫學

皇紀二千六百年紀念 自第一號合本
偕行學苑五周年紀念 至第十六號合本

發行所 東亞醫學協會
東京市牛込區新小川町二ノ七

電話牛込(34)二七七二番
振替東京一一九四三〇番

東亞醫學目次 自第一號 至第十六號

第一號

- 卷頭言 科學の洗禮を受けたる漢方醫を養成せよ……大塚 敬節
- 新東亞建設の一翼たれ……荒井 金造
- 藥を賣る者無眼……清水藤太郎
- 藥生の眞諦……石原 保秀
- 歐洲の方が漢方薬は盛ん……市原 分
- 東亞醫學の發刊に際して……木村 長久
- 發刊を祝す……矢數 有道
- 醫學の轉換期……矢數 有道
- 伸展工作は着々と……吉田 一郎
- 醫學制度調査會に陳情せよ……竹内吉五郎
- 感佩の至り……渡邊 温行
- 朝鮮にも機運熟す……石戸谷 勉
- 刮目してその活動を待つ……吳 文通
- 漢醫問題は極めて重大……岡西 爲人
- 中國にも敬服すべき著書多し……渡邊 瑛美
- 應分の努力惜しまず……代田 文誌
- 中國醫學の現状……大塚 敬節
- 鍼灸醫學を語る……柳谷 素靈
- 蟲媒突起炎の話……龍野 一雄
- 戰陣日誌……中島 宣雄
- 東亞醫學協會發會式開會の辭……矢數 道明
- 東西醫學協會々則……
- 東亞醫學協會各部主任決定……
- 卷頭言 大陸醫療對策の積極的意義……小柳 賢一
- 先覺猪野手代議士大陸醫療方策を闡明す……
- 現下に適應する漢方醫學復興私案……

第二號

- 本誌に寄せられたる諸大家の感想……矢數 道明
- 中國漢方醫學の現況と日華提携に就いて……大塚 敬節
- 拓殖大學東亞醫學專門部設立越意書……龍野 一雄
- 蟲媒突起炎の話(二)……大塚 敬節
- 戰爭は文化の母……大塚 敬節
- 私方穴(助腸炎の灸穴)使用實例……柳谷 素靈
- 河豚中毒と其療法……石原 保秀
- 北支中支へ特派員を派す……
- 協會研究の漢方藥新形式に製品化の上發賣せよ……
- 東京及橫濱優良品販賣會立上る……
- 卷頭言 大陸進出には藥劑師を動員せよ……小柳 賢一
- マラリヤの治療に漢方療法を採用せよ……
- 中南支の風土病たるマラリヤに就いて……小柳 賢一
- 漢方醫の見たマラリヤとその療法……大塚 敬節
- 八味丸の證を呈せるマラリヤ……龍野 一雄
- 瘧(マラリヤ)の鍼灸療法……柳谷 素靈
- 醫療の文化的意義と漢方……伊藤 凡人
- 日支提携偶感……内山 完三
- 中國漢方醫學の現況と日華提携に就て……大塚 敬節
- 陸相眼の上の瘤……石原 保秀
- 天津市衛生局長と漢方に就いて語る……中嶋 寅男
- 卷頭言 大陸醫療の適格・漢方薬々局方を作れ・精神の貧困を救へ・支那醫

第三號

- 藥衛生事情視察報告書……小柳 賢一
- 教育の理想と醫療の理想……清水藤太郎
- マラリアにアヂサイ……小柳 賢一
- 北京國醫學院訪記……
- 中支北支の風土病警見……
- 蒙疆地方に於ける藥草……
- 大陸の健康……中島 宣雄
- 入湯と疾病との關係……西澤 生惠
- 急性胃腸カタル鍼灸療法……柳谷 素靈
- 諸家の感想……木下宗孝・額原基
- 讀書餘録……石原 保秀
- 拓大漢方醫學講座講師及聽講生名簿……
- 卷頭言 非常時局下の醫師の務……小柳 賢一
- 特輯 醫學に遡る時代の聲音……
- 喘息の研究……
- 野草の一例……木村 長久
- 櫻柳と紫根(ハンカの藥)……石原 保秀
- 蟲媒突起炎の病理學……龍野 一雄
- 四關刺鍼の妙……柳谷 素靈
- 大同紀行……K K
- 上海だより……野邊 清
- 卷頭言 事變二週年と東亞醫學の希望……小柳 賢一
- 漢方復興への所感……矢數 有道
- 興亞工作と漢藥……吉田 一郎
- 漢方醫の見た赤痢とその療法……大塚 敬節
- 赤白痢と龍牙草……石原 保秀
- 國醫砥柱誌に答ふ歸脾湯の運用に就て……矢數 道明
- 吃逆(しゃくり)の治療法……矢數 道明
- 蟲媒突起炎の症狀及び診斷……龍野 一雄
- 風の字の附く病氣の話……大塚 敬節

第五號

- 卷頭言 非常時局下に於ける漢藥業者の自肅自戒や要請す……小柳 賢一
- 漢方醫家の立場から「灸の話」放送事件を見る……矢數 有道
- 脚氣の漢方療法……大塚 敬節
- 手に觸れる經絡……柳谷 素靈
- 黃蘗と隔噎……石原 保秀
- 支那長江餘滴……龍野 一雄
- 蟲媒突起炎の症狀及診斷……龍野 一雄
- 無醫村を行く……神谷 卓
- 最近讀書の内より……龍野 一雄
- 卷頭言 漢方醫と處方箋發行問題……小柳 賢一
- 結核療防對策につき協會全員の協力を要請す……
- 癩の燒針療法……石原 保秀
- 鍼灸と刺戟……柳谷 素靈
- 鍼灸と按摩マッサージ……戸部宗七郎
- 蟲媒突起炎の症狀及診斷……龍野 一雄
- ある往診……竹中 篤庵
- 竹林雀語……龍野 一雄
- 支那長江餘滴……龍野 一雄
- 果物と砂糖と疾病との關係……西澤 生惠
- 刺鍼による内臟穿孔の數例……龍野 一雄
- 卷頭言 醫師法改革案と漢方醫家の盟結……大塚 敬節
- 處方箋問題と漢方醫の立場……矢數 有道
- 刺鍼過誤……柳谷 素靈
- 九月號讀後感あり……戸部宗七郎
- 蟲媒突起炎の療法に就て……龍野 一雄
- 漢方醫學上より觀たる肺結核の治療及療防法……矢數 道明

第七號

- 砂糖と果物と疾病との關係……西澤 生惠
- 食養學上より觀たる治療及療防法……小出 壽
- 初秋蟬吟……竹 茹 生
- 卷頭言 五行説と漢方醫學……大塚 敬節
- 葉橋泉氏の近世内科國藥處方集を讀む……
- 中支の醫藥事情見聞記……清水藤太郎
- 肺結核の漢方醫學的療防及治療法……矢數 有道
- 傷病將士と漢方……石原 保秀
- 處方箋問題と漢方醫の立場……矢數 有道
- 刺鍼による内臟穿孔の問題……代田 文誌
- 鐘樓餘韻……竹 茹 生
- 卷頭言 漢方と神祕主義……龍野 一雄
- 鍼灸醫學より觀たる肺結核の療防及治療……柳谷 素靈
- 療の善ぶ鴨の頭……石原 保秀
- 産後の出血に對する東西醫學の見解相違……矢數 有道
- 刺鍼過誤の問題について……龍野 一雄
- 無醫村を行く(續)……神谷 卓
- 風邪の漢方療法……大塚 敬節
- 卷頭言 辰の年を迎へて、その他……
- 方證相對說批評に就て……龍野 一雄
- 急性肺水腫を紫圍で救ふ……矢數 有道
- 抱杞は養生の仙藥……石原 保秀
- 傷寒論に現はれたる物理療法……大塚 敬節
- 身邊雜記……竹 茹 生
- 漢方醫家とビタミン……大浦 孝秋
- 先哲醫訓復唱……大塚 敬節
- 鍼灸の發生に關する一考察……龍野 一雄
- 黃道の治療……龍野 一雄
- 治療實例(大塚敬節譯)……葉橋 泉
- 蘇州の名醫葉橋先生を訪ねて……
- 治方看的……本多 精一
- 荒木 性次

第四號

- 藥衛生事情視察報告書……小柳 賢一
- 教育の理想と醫療の理想……清水藤太郎
- マラリアにアヂサイ……小柳 賢一
- 北京國醫學院訪記……
- 中支北支の風土病警見……
- 蒙疆地方に於ける藥草……
- 大陸の健康……中島 宣雄
- 入湯と疾病との關係……西澤 生惠
- 急性胃腸カタル鍼灸療法……柳谷 素靈
- 諸家の感想……木下宗孝・額原基
- 讀書餘録……石原 保秀
- 拓大漢方醫學講座講師及聽講生名簿……
- 卷頭言 非常時局下の醫師の務……小柳 賢一
- 特輯 醫學に遡る時代の聲音……
- 喘息の研究……
- 野草の一例……木村 長久
- 櫻柳と紫根(ハンカの藥)……石原 保秀
- 蟲媒突起炎の病理學……龍野 一雄
- 四關刺鍼の妙……柳谷 素靈
- 大同紀行……K K
- 上海だより……野邊 清
- 卷頭言 事變二週年と東亞醫學の希望……小柳 賢一
- 漢方復興への所感……矢數 有道
- 興亞工作と漢藥……吉田 一郎
- 漢方醫の見た赤痢とその療法……大塚 敬節
- 赤白痢と龍牙草……石原 保秀
- 國醫砥柱誌に答ふ歸脾湯の運用に就て……矢數 道明
- 吃逆(しゃくり)の治療法……矢數 道明
- 蟲媒突起炎の症狀及び診斷……龍野 一雄
- 風の字の附く病氣の話……大塚 敬節

第六號

- 卷頭言 非常時局下に於ける漢藥業者の自肅自戒や要請す……小柳 賢一
- 漢方醫家の立場から「灸の話」放送事件を見る……矢數 有道
- 脚氣の漢方療法……大塚 敬節
- 手に觸れる經絡……柳谷 素靈
- 黃蘗と隔噎……石原 保秀
- 支那長江餘滴……龍野 一雄
- 蟲媒突起炎の症狀及診斷……龍野 一雄
- 無醫村を行く……神谷 卓
- 最近讀書の内より……龍野 一雄
- 卷頭言 漢方醫と處方箋發行問題……小柳 賢一
- 結核療防對策につき協會全員の協力を要請す……
- 癩の燒針療法……石原 保秀
- 鍼灸と刺戟……柳谷 素靈
- 鍼灸と按摩マッサージ……戸部宗七郎
- 蟲媒突起炎の症狀及診斷……龍野 一雄
- ある往診……竹中 篤庵
- 竹林雀語……龍野 一雄
- 支那長江餘滴……龍野 一雄
- 果物と砂糖と疾病との關係……西澤 生惠
- 刺鍼による内臟穿孔の數例……龍野 一雄
- 卷頭言 醫師法改革案と漢方醫家の盟結……大塚 敬節
- 處方箋問題と漢方醫の立場……矢數 有道
- 刺鍼過誤……柳谷 素靈
- 九月號讀後感あり……戸部宗七郎
- 蟲媒突起炎の療法に就て……龍野 一雄
- 漢方醫學上より觀たる肺結核の治療及療防法……矢數 道明

第九號

- 砂糖と果物と疾病との關係……西澤 生惠
- 食養學上より觀たる治療及療防法……小出 壽
- 初秋蟬吟……竹 茹 生
- 卷頭言 五行説と漢方醫學……大塚 敬節
- 葉橋泉氏の近世内科國藥處方集を讀む……
- 中支の醫藥事情見聞記……清水藤太郎
- 肺結核の漢方醫學的療防及治療法……矢數 有道
- 傷病將士と漢方……石原 保秀
- 處方箋問題と漢方醫の立場……矢數 有道
- 刺鍼による内臟穿孔の問題……代田 文誌
- 鐘樓餘韻……竹 茹 生
- 卷頭言 漢方と神祕主義……龍野 一雄
- 鍼灸醫學より觀たる肺結核の療防及治療……柳谷 素靈
- 療の善ぶ鴨の頭……石原 保秀
- 産後の出血に對する東西醫學の見解相違……矢數 有道
- 刺鍼過誤の問題について……龍野 一雄
- 無醫村を行く(續)……神谷 卓
- 風邪の漢方療法……大塚 敬節
- 卷頭言 辰の年を迎へて、その他……
- 方證相對說批評に就て……龍野 一雄
- 急性肺水腫を紫圍で救ふ……矢數 有道
- 抱杞は養生の仙藥……石原 保秀
- 傷寒論に現はれたる物理療法……大塚 敬節
- 身邊雜記……竹 茹 生
- 漢方醫家とビタミン……大浦 孝秋
- 先哲醫訓復唱……大塚 敬節
- 鍼灸の發生に關する一考察……龍野 一雄
- 黃道の治療……龍野 一雄
- 治療實例(大塚敬節譯)……葉橋 泉
- 蘇州の名醫葉橋先生を訪ねて……
- 治方看的……本多 精一
- 荒木 性次

第十號

- 砂糖と果物と疾病との關係……西澤 生惠
- 食養學上より觀たる治療及療防法……小出 壽
- 初秋蟬吟……竹 茹 生
- 卷頭言 五行説と漢方醫學……大塚 敬節
- 葉橋泉氏の近世内科國藥處方集を讀む……
- 中支の醫藥事情見聞記……清水藤太郎
- 肺結核の漢方醫學的療防及治療法……矢數 有道
- 傷病將士と漢方……石原 保秀
- 處方箋問題と漢方醫の立場……矢數 有道
- 刺鍼による内臟穿孔の問題……代田 文誌
- 鐘樓餘韻……竹 茹 生
- 卷頭言 漢方と神祕主義……龍野 一雄
- 鍼灸醫學より觀たる肺結核の療防及治療……柳谷 素靈
- 療の善ぶ鴨の頭……石原 保秀
- 産後の出血に對する東西醫學の見解相違……矢數 有道
- 刺鍼過誤の問題について……龍野 一雄
- 無醫村を行く(續)……神谷 卓
- 風邪の漢方療法……大塚 敬節
- 卷頭言 辰の年を迎へて、その他……
- 方證相對說批評に就て……龍野 一雄
- 急性肺水腫を紫圍で救ふ……矢數 有道
- 抱杞は養生の仙藥……石原 保秀
- 傷寒論に現はれたる物理療法……大塚 敬節
- 身邊雜記……竹 茹 生
- 漢方醫家とビタミン……大浦 孝秋
- 先哲醫訓復唱……大塚 敬節
- 鍼灸の發生に關する一考察……龍野 一雄
- 黃道の治療……龍野 一雄
- 治療實例(大塚敬節譯)……葉橋 泉
- 蘇州の名醫葉橋先生を訪ねて……
- 治方看的……本多 精一
- 荒木 性次

第十二號

- 砂糖と果物と疾病との關係……西澤 生惠
- 食養學上より觀たる治療及療防法……小出 壽
- 初秋蟬吟……竹 茹 生
- 卷頭言 五行説と漢方醫學……大塚 敬節
- 葉橋泉氏の近世内科國藥處方集を讀む……
- 中支の醫藥事情見聞記……清水藤太郎
- 肺結核の漢方醫學的療防及治療法……矢數 有道
- 傷病將士と漢方……石原 保秀
- 處方箋問題と漢方醫の立場……矢數 有道
- 刺鍼による内臟穿孔の問題……代田 文誌
- 鐘樓餘韻……竹 茹 生
- 卷頭言 漢方と神祕主義……龍野 一雄
- 鍼灸醫學より觀たる肺結核の療防及治療……柳谷 素靈
- 療の善ぶ鴨の頭……石原 保秀
- 産後の出血に對する東西醫學の見解相違……矢數 有道
- 刺鍼過誤の問題について……龍野 一雄
- 無醫村を行く(續)……神谷 卓
- 風邪の漢方療法……大塚 敬節
- 卷頭言 辰の年を迎へて、その他……
- 方證相對說批評に就て……龍野 一雄
- 急性肺水腫を紫圍で救ふ……矢數 有道
- 抱杞は養生の仙藥……石原 保秀
- 傷寒論に現はれたる物理療法……大塚 敬節
- 身邊雜記……竹 茹 生
- 漢方醫家とビタミン……大浦 孝秋
- 先哲醫訓復唱……大塚 敬節
- 鍼灸の發生に關する一考察……龍野 一雄
- 黃道の治療……龍野 一雄
- 治療實例(大塚敬節譯)……葉橋 泉
- 蘇州の名醫葉橋先生を訪ねて……
- 治方看的……本多 精一
- 荒木 性次

第十三號

- 砂糖と果物と疾病との關係……西澤 生惠
- 食養學上より觀たる治療及療防法……小出 壽
- 初秋蟬吟……竹 茹 生
- 卷頭言 五行説と漢方醫學……大塚 敬節
- 葉橋泉氏の近世内科國藥處方集を讀む……
- 中支の醫藥事情見聞記……清水藤太郎
- 肺結核の漢方醫學的療防及治療法……矢數 有道
- 傷病將士と漢方……石原 保秀
- 處方箋問題と漢方醫の立場……矢數 有道
- 刺鍼による内臟穿孔の問題……代田 文誌
- 鐘樓餘韻……竹 茹 生
- 卷頭言 漢方と神祕主義……龍野 一雄
- 鍼灸醫學より觀たる肺結核の療防及治療……柳谷 素靈
- 療の善ぶ鴨の頭……石原 保秀
- 産後の出血に對する東西醫學の見解相違……矢數 有道
- 刺鍼過誤の問題について……龍野 一雄
- 無醫村を行く(續)……神谷 卓
- 風邪の漢方療法……大塚 敬節
- 卷頭言 辰の年を迎へて、その他……
- 方證相對說批評に就て……龍野 一雄
- 急性肺水腫を紫圍で救ふ……矢數 有道
- 抱杞は養生の仙藥……石原 保秀
- 傷寒論に現はれたる物理療法……大塚 敬節
- 身邊雜記……竹 茹 生
- 漢方醫家とビタミン……大浦 孝秋
- 先哲醫訓復唱……大塚 敬節
- 鍼灸の發生に關する一考察……龍野 一雄
- 黃道の治療……龍野 一雄
- 治療實例(大塚敬節譯)……葉橋 泉
- 蘇州の名醫葉橋先生を訪ねて……
- 治方看的……本多 精一
- 荒木 性次

第十四號

- 先哲醫訓復唱... 大塚 敬節
中國の漢方を訊く... 本多 精一
急性肝臟肥大に消汗飲を與ふ... 矢數 有道
當歸四逆加吳・生湯の治驗四例... 大塚 敬節
刺鍼過誤問題の取り上げ方に就て... 大塚 敬節
桂枝は桂の枝... 竹山 晋
瀉癖症漫筆... 清水藤太郎
治療實例(犬塚敬節)... 萩里 人
葉 橘 泉

第十五號

先哲醫訓復唱... 大塚 敬節

東亞醫學協會の設立に就て

東亞醫學協會設立趣意書

曩に吾等同志相謀つて拓殖大學に漢方醫學講座を開設するや、天下の視聽翕然としてこゝに聚り、廣く内外よりの賛助激勵の辭殆んど應接に遑なき有様であつた。而して聽講者は毎回堂に溢るゝの盛況を呈し、中には通譯者を同伴せる中華民國人あり、又遠く朝鮮臺灣等より上京せる特志家數名を算へ、既に講座を開くと四回に及び實に三百五十有餘名の修了者を出すことを得たのである

第十六號

- 病名考... 木村 長久
進行性筋肉萎縮症の治驗... 代田 文誌
眼科方函... 大塚 敬節
腸捻轉を漢方的に處置し得るや... 矢數 有道
括裏難白白酒湯の治驗... 矢數 有道
經絡の發生に就て... 龍田 行彦
國民體質向上の道... 鮎川 靜
崑崙穴位置とその運用... 柳谷 素靈
腹水治驗... 杏 邨
私語放散... 小出 壽
古矢知白と其治驗... 坂下 北門
東亞醫學協會五週年紀念事務報告...

て思ふに東亞永遠の平和は固より其の基礎を日華滿三國の緊密なる親善提携の上に置かねばならぬ。されば先般既に北京に於て各有力使節の交驩あり、東亞文化協議會の發會式が行はれたのである。然し乍ら退いて想ふに三國民が渾然と融和し、相信頼し眞に提携の實を擧げんが爲めには、醫學醫術によるの捷徑たるを信じて疑はぬものである。勿論既に彼地には我が軍所屬衛生隊の目覺しき活躍あり、診療上防疫上實に赫々たる功績を擧げつゝあるのではあるが中國醫學界の現状を觀るに同國には數千年傳來の漢方醫學が嚴として存し國民一般の信賴程度は遙かに洋醫に勝るものである。されば吾等は同國と直ちに洋醫學のみを以て提携の實績を擧ぐることに全く不可能なるべきを痛感するものであつて、その實行に當ては必ず西洋醫學と同時に漢方醫學とを併行せしめ、長短相補

ひ有無相通せしめて以て完璧なる濟生融和の實績を擧ぐることに邁進せねばならぬと思ふ。
盟邦滿洲國に於ける現状は、康徳四年に醫師及漢醫師法の制定あり、同二年四月現在に於ける醫師數一萬一千二百七十三名中、漢醫の數は實に九千二百二十七名の多きを算し、洋醫は僅かに二千四十八名に過ぎない。中華民國に於ても略々同様の状態であるが故に、單純に洋醫學のみを以て其の儘移植強制し能はざるの理歴然たるものがあらう。今日我が國に於ても尙ほ且つ漢方醫學を以て一も採るべきものなき未開醫學なりとし、その復興を白眼視し、又は中國及滿洲國の漢醫をして悉く洋方醫化せんとする者あるは、全く漢方醫學の何たるかを解せざるものである吾等の同志は既に聖戰に参加して巧みに漢方を活用し、マラリアの優秀なる治療に成功し或は彼地特有なる痢疾の豫防と治療に新機軸を拓き、又中國の漢醫と交遊し美はしき日華親善の實を擧げてゐる。
茲に於て吾等は其の恒久的政策を樹立し、彼我の緊密なる提携と永遠の平和確立との爲めに貢獻せんとし非常時局下に於ける文化的奉公の赤誠に燃ゆるものである。今こそ三國の提携の下に漢方醫學の飛躍進展を圖り、之が醫育機關の強化擴大、漢方病院、漢方圖書館の設立、和漢藥草の採取栽培の研究等を行ひ、事變後に來るべき東亞の新時代を指導する眞の東洋醫學の完成に邁進せんとするものである。是れ吾等が大方の賛同を得て今回東亞醫學協會を設立し以て復興途上に在る漢方醫學の再

- 檢討に拍車を加ふると共に、内は以て國民體位の向上に資し、外は、以て日華滿三國の親善提携の急務に應じ、東亞永遠の和平確立に寄與せんとする所以である。
昭和十三年十一月廿三日
拓殖大學漢方醫學講座講師
東亞醫學協會理事
石原 保秀、大塚 敬節
龍野 一雄、矢數 道明
矢數 有道、柳谷 素靈
木村 長久、清水藤太郎 (イロハ順)

東亞醫學協會々則
一、名稱 本協會ハ東亞醫學協會ト稱ス
一、目的 本協會ハ日華滿三國ニ於ケル東亞醫學ノ交際研究ヲナシ、相互ノ親善交友ヲ緊密ナラシメ、進ンデ東洋文化ノ振興ヲ圖リ、以テ東亞永遠ノ平和確立ノ爲メニ貢獻セントス
一、事業 本會ハ目的達成ノため左ノ事業ヲ行フ
一、機關誌東亞醫學ノ刊行
一、各國ニ於ケル機關誌ノ交換
一、各國ニ於ケル著書論文ノ交換
一、各國ニ於ケル優良藥品ノ交換
一、研究生視察團ノ遊學交換
一、漢方病院ノ設立、漢方圖書館ノ設立、和漢藥研究所、漢方醫學教育機關等ノ設立
一、其ノ他目的達成ニ必要ト認ムル諸事業
一、月次例会ヲ開ク
本部 東京市小石川區若荷谷町卅二番地 拓殖大學漢方醫學講座内(電話大塚一三〇番 六七三〇番)
事務所 東京市牛込區新小川町二丁目七番地 借行學苑内(電話牛込二七二七番)通信及問合セ等ハ一切事務所宛
理事 當分ノ間拓殖大學漢方醫學講座講師ヲ理事トス
會員 本會ノ主旨ニ賛成シ、目的達成ノため盡力セントスルモノ
會費 「東亞醫學」誌代年一圓二十錢ヲ同時ニ會費ニ當ツ(例會ニ於ケル出席者ハソノ都度會場費ノミヲ申受クルコトアルベシ)
贊助員 本會ノ主旨ニ賛成シ、目的達成ノため助力セラルルモノ
顧問 本會ノ事業遂行上顧問若干名ヲ置ク
月刊誌 漢方と漢藥
定價五十錢、送料二錢
半年三圓、一年六圓
日本漢方醫學會は漢方醫學・和漢藥・本草學の研究を目的とし、醫師、藥劑師及斯學を研究せんとする者を以て組織す。
月刊誌「漢方と漢藥」は即ち日本漢方醫學會の機關誌にして、本誌を購讀する者は本會々員たる事を得本會主催の講演會・座談會等に出席する事を得、誌代以外に會費は徴收する事なし。
發行所 日本漢方醫學會
東京市京橋區橫町二ノ五二二ビル
振替東京六五七番
電話京橋〇三番

「東亜医学」目次

(自第一号・至第廿六号)

第一号

卷頭言 科学の洗礼を受けたる漢方医を養成せよ

新東亜建設の一翼たれ

薬を売る者無眼

養生の真諦

欧洲の方が漢方薬は盛ん

東亜医学の発刊に際して

発刊を祝す

医界の転換期

伸展工作は着々と

医療制度調査会に陳情せよ

感佩の至り

朝鮮にも機運熟す

刮目してその活動を待つ

漢医問題は極めて重大

中国にも敬服すべき著書多し

応分の努力惜しみます

中国医界の現状

鍼灸医学を語る

虫様突起炎の話

戦陣日誌

東亜医学協会発会式開会の辞

東亜医学協会々々

東亜医学協会各部主任決定

第二号

卷頭言 大陸医療対策の積極的意義

先覚猪野毛代議士大陸医療方策を闡明す

現下に適応する漢方医学復興私案

本誌に寄せられたる諸大家の感想中国漢方医界の現況と日華提携に就いて

大塚 敬節
矢数 道明
小柳 賢一
大塚 敬節

拓殖大学東亜医学専門部設立趣意書
虫様突起炎の話(二)
戦争は文化の母

私方穴「肋膜炎の灸穴」使用実例

河豚中毒と其療法

北支中支へ特派員を派す

協会研究の漢方薬新形式に製品化の上発売さる

東京及横浜優良品販売会立上る

第三号

卷頭言 大陸進出には薬剤師を動員せよ

マラリヤの治療に漢方療方を採用せよ

中南支の風土病たるマラリヤに就いて

漢方医の見たマラリヤとその療法

八味丸の証を呈せるマラリヤ

瘧(マラリヤ)の鍼灸療法

医療の文化的意義と漢方

日支提携偶感

中国漢方医界の現況と日華提携に就て

陸相眼の上の瘤

天津市街衛生局長と漢方に就いて語る

第四号

卷頭言 大陸医療の適格・漢方薬々局方を作れ・精神の貧困を救へ・支那医薬衛生事情視察報告書

教育の理想と医療の理想

マラリヤにアヂサイ

北京国医学院訪問記

中支北支の風土病管見

蒙疆地方に於ける薬草

大陸の健康

入湯と疾病との関係

急性胃腸カタル鍼灸療法

諸家の感想

読書余録

拓大漢方医学講座講師及聴講生名簿

小柳 賢一
大塚 敬節
柳谷 素靈
石原 保秀

第五号

卷頭言 非常時局下の医師の務

特輯 医界に逼る時代の蹇音

野草の研究

喘息の一例

裡柳と紫根(ハシカの薬)

虫様突起炎の病理学

四関刺鍼の妙

大同紀行

上海だより

第六号

卷頭言 事変二週年と東亜医学の希望

漢方復興への所感

興亜工作と漢薬

漢方医の見た赤痢とその療法

赤白痢と龍牙英

国医砥柱誌に答ふ婦脾湯の運用に就て

吃逆(しゃくり)の治療法

虫様突起炎の症状及び診断

風の字の附く病氣の話

第七号

卷頭言 非常時局下に於ける漢薬業者の自肅自戒を要望す

漢方医家の立場から「灸の話」放送事件を見る

脚氣の漢方療法

手に触れる経路

黄蘗と膈噎

支那長江余滴

虫様突起炎の症状及診断

無医村を行く

最近読書の内より

木下宗孝・額原 基
石原 保秀
大塚 敬節
柳谷 素靈
西沢 生恵
中島 寅男
小柳 賢一
清水藤太郎
小柳 賢一

龍野 一雄
大塚 敬節
柳谷 素靈
石原 保秀

木村 長久
石原 保秀
龍野 一雄
柳谷 素靈

K K 生
野辺 清

矢数 有道
吉田 一郎
大塚 敬節
石原 保秀

矢数 有道
龍野 一雄
大塚 敬節

矢数 有道
大塚 敬節
柳谷 素靈
石原 保秀

龍野 一雄
龍野 精

龍野 一雄
神谷 卓

龍野 一雄

第八号

卷頭言 漢方医と処方箋発行問題

結核予防対策につき協会全員の協力を要望す

癩の焼針療法

鍼灸と刺戟

鍼灸と按摩マッサージ

虫様突起炎の症状及診断

ある往診

竹林雀語

支那長江余滴

果物と砂糖と疾病との関係

刺戟による内臓穿孔の数例

第九号

卷頭言 医師法改革案と漢方医家の団結

処方箋問題と漢方医の立場

刺戟過誤

九月号読後感あり

虫様突起炎の療法に就て

漢方医学上より観たる肺結核の治療及予防法

砂糖と果物と疾病との関係

食養学上より観たる治療及予防法

初秋蟀吟

第十号

卷頭言 五行説と漢方医学

葉橋泉氏の近世内科國藥処方集を読む

中支の医薬事情見聞記

肺結核の漢方医学的予防及治療法

傷病将士と漢方

処方箋問題と漢方医の立場

刺戟による内臓穿孔の問題

鐘楼余韻

第十一号

卷頭言 漢方と神秘主義

鍼灸医学より観たる肺結核の予防及治療

狐の喜ぶ鳴の頭

産後の出血に対する東西医学の見解相違

刺戟過誤の問題について

無医村を行く(続)

風邪の漢方療法

第十二号

卷頭言 辰の年を迎へて、その他方

証相對説批評に就て

急性肺水腫を紫田で救ふ

枸杞は養生の仙薬

傷寒論に現はれたる物理療法

身辺雑記

漢方医家とビタミン

第十三号

先哲医訓復唱

鍼灸の發生に関する一考察

黄痘の治驗

治療実例(大塚敬節訳)

蘇州の名医葉橋泉先生を訪ねて

治方看的

第十四号

先哲医訓復唱

中国の漢方を訊く

急性肝臓肥大に消瘕飲を与ふ

当帰四逆加呉生湯の治驗四例

刺戟過誤問題の取り上げ方に就て

桂枝は桂の枝

潔癖症漫筆

治療実例(大塚敬節訳)

第十五号

龍野 一雄 先哲医訓復唱

柳谷 素靈 病名考

石原 保秀 進行性筋肉萎縮症の治驗

矢数 有道 眼科方函

龍野 一雄 腸捻転を漢方的に処置し得るや

神谷 卓 括婁薤白酒湯の治驗

大塚 敬節 経路の發生就て

第十六号

龍野 一雄 国民体質向上の道

矢数 有道 崑崙穴位置とその運用

石原 保秀 腹水治驗

大塚 敬節 私語放散

竹 茹 生 古矢知白と其治驗

大浦 孝秋 東亜医学協会五周年記念事務報告

第十七号

大塚 敬節 支那に於ける漢方医学の将来性

龍野 一雄 漢方医学の治療と其性格

龍野 一雄 日本医事新報の社説を検討し満州国及び中国の漢医問題に及ぶ(一)

葉 橋 泉 藏草栽培寸言

本多 精一

荒木 性次

第十八号

漢方医学に於ける和と攻との精神

主之

初生児発啼術に就て

大陸に於ける新医療体制の制定と漢方医術の問題

満州国漢医と其将来及教育問題

薬草採集ハイキング

随想

治驗

大塚 敬節

木村 長久

代田 文誌

大壁 敬節

矢数 有道

矢数 有道

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

龍野 一雄

第十九号

大塚 敬節

龍野 一雄

石原 保秀

竹山 晋一郎

栗原 広三

館野 軍次

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

湯本 求真

漢方の脈診に就て
上海の名医時逸人氏を訪ねて
満州の旅
日本医事新報社の社説を検討し
満州国及中国の漢医問題に及ぶ(二)
修琴堂治験

第二十号

新体制と東亜医学の建設
漢方の概念と現代的使命
羸瘦患者の治験
修琴堂治験(一)
麻黄湯の症と鍼治験
渡満報告
日本医事新報の社説を検討し
満州国及中国の漢方問題に及ぶ(三)

第二十一号

明治維新の回顧と我等の使命
婦人科的疾患に対する漢方治療の特徴
二種の体質と薬用
漢方廃止は暴政なり
中島寅男中尉の講演
漢方図書館の誕生

第二十二号

東亜医学協会新機構
可能性実現性の問題
東亜医学協会の現未に対し愚見を披歴す
マラリアの漢方療法
快誠堂治験
紫円に就く

第二十三号

医療の普及と無医村問題・古方と新方
歴史認識の問題
男子の黄、小便自利するは当に小建中湯を与ふべし

安西 安周 腹膜炎の鍼灸治験例
本多 精一 新陳代謝と摩擦中心の療法
龍野 一雄 大建中湯に就て
矢数 道明 同経刺治験二題
大塚 敬節 尿毒症治験

第二十四号

矢数 有道 名医とその治療―塩田陳庵―(一)
矢数 道明 竹山氏に呈する第二報
倉島 宗二 化膿性疾患の治療
大塚 敬節 漢方復興運動における政治と學術
井上 惠理 鍼灸規則の改正に就て
工藤 訓正 漢方医師団結成を横目で見る
矢数 道明 東医文化顯彰

第二十五号

龍野 一雄 日華漢方医学特輯号発刊に就て
矢数 道明 存濟医盧治験記
清水藤太郎 漢方医学の原理略談
滝田 行彦 暑火熱火之別説
編集部 中国之医学落後
編集部 満州国医学研究所機構私案
編集部 中国医界の現況

第二十六号

竹山晋一郎 東亜医学の廃刊に際して
小柳 賢一 東亜医学誌の終刊に題す
中島 寅男 漢方鍼灸と高等数学
中島 寅男 田舎便り

第二十七号

龍野 一雄 北京通信
矢数 有道 拓大漢方図書館開館式
存濟医盧治験記(大塚敬節記)

岡部 素道 漢医診断と調剤法
石原 保秀 發展的解消
深瀬 深造 温知社遺品を協会へ
柳谷 素靈 借行学苑創立記念大講演会
大塚 敬節 拓大漢方図書館開館式

〔附記〕 機関誌「東亜医学」は戦時下雑誌統合令により廿六号を以て「漢方と漢薬」に合併して廃刊、戦後「漢方の臨床」として再出発した。

大塚 敬節
龍野 一雄
龍野 一雄
竹山晋一郎
龍田 行彦
多々野凡兒
永山 昇純
中原富一郎
竹茹 生

矢数 道明
葉橋 泉
張珠 菴
白依山
高其 湘
龍野 一雄
龍野 一雄
本多 精一

木村 長久
矢数 道明
山元 吾策
滝田 行彦
尾瀨順久
葉橋 泉

銭 問停
編集部

新東亞建設の一翼たれ

拓殖大學幹事 荒井金造

私は一昨年歸朝して母校の仕事をする様になりましたが、それまで殆んど三十年に及ぶ長い間大陸にくらし、支那奥地も随分各地に足跡を印したのであります。事變前の支那に於ける歐米諸國の進出振りまことに目撃しいものがありました。そして、彼等歐米人が土民の信頼を得てゐるといふことは仲々に深く、その深いことについて感ずる根拠があると深く感じました。彼等歐米人の進出するや、先づ教會を立てる。その教會には必ず病院或は診療所が附屬してゐる。そしてこの病院は地方の土民を診療救助するといふやうなものである。教會及病院は地方に不似合の積立派なものがまさかと思ふ様な縣といふ位の處まであつて、大陸の空に米國或は英國佛國等の國旗をひるがへしてゐる。それを見る私にはまことに感慨無量のものがありました。

併し又一方支那の民衆は仲々傳統を重んずる氣風が強いのであります。例へば首府南京に行つて見ればわかるのであるが、國民政府其他の經營した中央政府の建築物等を見ても、歐米のものをそっくり模倣したものと云つては殆んどないのであります。海外にある華僑と云ひますか、支那人もあくまでその生活の様式を守つて押しを以てやつて居るのであります。この氣風は國內の生活の上にもあらはれて居て、醫療の如きも、決して歐米のそれを全幅的に信じて居らない。私はそれを例證する様な出来事に、到る處で遭遇しまし

た。而して支那の民衆が傳統的に信頼して居るのは、矢張漢方である。その時分に私の考へましたところは日本にも明治初期迄はその漢方があつて大いに進歩繁榮して居た。若し今日尙その漢方が昔日の力を以て、否昔日の漢方に今日新しい科學の上に成し上げた聰明な日本人の力を加へたるものを以て我々日本の大陸發展に寄與せしめ得たならいか許りのものであらうであらう。常に懐々の感慨に打たれたのであります。

實際植民のこと、貿易發展のこととは醫療を通じて進めて行くのが最も捷徑であり、最も効果的であります。遠い西歐人が支那に先頭を植へ得たのは、支那に先頭師が進軍し、そのあとから彼等の商品が進んで遂に支那をその植民地にしてしまつたのです。今度の事變にあつても、きく處によれば宜撫官とか開教僧などもたゞ説教する丈では仲々支那人も寄りつ

かない。そこで、賣藥を持つて居て病氣のものなどにその藥を與へたりすると、それが縁となつて皆ふりこんで出入りする様になるといふ實情にあります由、全く醫療の手を差のべることは第一に必要のことであり、然も漢方の心得ある醫者がそのことにあつれば、申分ないのであるが、現在の日本ではもう漢方などはすつかりすたれて終つて、その様なことを考へるのには先づ夢の様なもので思つて心淋しく歸朝したのであります。

併も歸朝した私が、非常に驚いたことには、我國に於て立派な漢方の先生方が居て、その研究普及に大いに力をつくして居ることであり、更にそれが漢方醫學講座といふ立派な組織を以てもう數年前より、然も我母校たる拓殖大學に於て行はれて居ることを知つた時は、何んが私が大膽中を抱いて廻つた夢が、實は實際であり、神明の加護によつて私に感通して居たのではなかつたかと且驚き且喜んだのであります。

漢方醫學講座の講師諸君が中心になり、東亞醫學協會を組織して我民族使命達成の線に沿つて日滿支三國民の親善提携に漢方醫學をもつてすることを計畫されることは第一に有効適切のことであつて急速に發展實現せんことを祈るや切なのであります。(文責在記者)

藥を賣る者無眼

拓大講師 清水藤太郎

近來漢方醫學の科學的研究が漸次旺盛となりつゝあるが、之に用ふる漢藥を通過するに實に寒心にたえない者がある。其不良品は

- 一、全然名實相悖はざるもの
- 二、他物を混じたるもの
- 三、品質劣等なるもの
- 四、無用の加工をなしたるもの

が少なからず横行してゐる。之は業界が唯傳統によるのみならず、又其學術的研究者の多くは臨牀を無視して文獻のみによる机上の空論が少なくないにも歸する。

中華民國の藥業界に於ても藥物は必ずしも眞品ではない。之は嘗てプレトシユナイダーが論ぜし如

く、同地に於ける漢藥採集は山地の特殊業者の手にありて採集地を秘してゐるから、戦亂其他の動機に因り經驗者が急に居なくなるゝ類似の者が類似のものを探査して藥店に擔ぎ込む。藥店には別に科學的檢定法が無いから屢々代用品が成功する。斯くして長年月の間別物が正名を冒す、又一局所に於て品が無くると他から類似品を持つて来る、又中國は土地廣大しかも統一が少なかつたから同名異物、同物異名がかなり多い。之が混亂の原因となつてゐる。又所謂修治と稱して例へば桔梗は長く水浸して純白に晒し、芍藥を水煮してエキス分を去つて白色とかし、大蠟を蜜に漬け炬子を黒燒とし、桂枝の皮を去つて木部のみを常用するが如きは其合理性を知るに苦しむのである。

斯の如き混亂は畢竟漢藥界に品質に關する確たる規準が無い爲めである。よく「藥を賣る者無眼、藥を用ふる者無眼」といふが、今の所無眼を備ふる者がない、其是非を判ずべき標準がない、各人各様に其良否を判じてゐるから東西數千里を隔つる中國と日本とが其品質を異にするは當然である。いくら疾病を科學的に診斷しても方劑に用ふる藥物にして斯の如き現狀にては藥效を所期する事不可能である。必ず診斷と平行して之に用ふる漢藥の規準を確立しなければならぬ。

- 一、肉眼及ルーペにて
- 二、顯微鏡にて
- 三、細胞組織を鏡檢
- 四、灰分法 灰分の骨格を鏡檢
- 五、透明法
- 六、表面の刻印を作り鏡檢



(寫眞は發會式の光景)

臨牀上經濟上最良とするやを確定して一の藥局方を作り之を天下に公示して、其品質を一定しなればならぬ。遺憾ながら、漢方醫學は長い間學術界より遠ざかり今は漢藥を漢方醫學的に究明する所がない。故に之が研究所及研究者の教育機關の設立が焦眉の急である。漢方藥の日滿中合同の一大研究所を作り漢方醫學を經つて洋方醫學を緯として縱横に之を調査する必要がある。今又專門學校設立の議ありと聞くは漢方研究者の一大福音である。漢方醫學による日滿中の親善提携は昭和十四年の一大モットでなければならぬ。

養生の眞諦

石原保秀

畏れども明治大帝の御製に常い身の養ひ草をつみてこそ人のよはひはのぶべかりけれと申すのがある。曾て貝原益軒が「園に草木を植えて愛する人は、朝夕心にかけて水を灌ぎ、土をかひ肥をし、蟲を去てよく養ひ、其榮えを悦び、衰へをうれふ。草木に至りて軽し、わが身は至りて重し。豈我身を愛すること、草木にも如かざるべきや」と云ふたのも、幾分似通つた意味があるやうに考へられる。徐春圃の古今醫統には、「園に灌ぐは蔬を養ふ所以なり、禽を驅るは果を養ふ所以なり。養生の士豈蔬を養ひ、果を養ふの人に如かざらんや」とある。

方に「凡そ人自ら十日已上康健を覺えば、即ち須らく三數の穴に灸し、以て風氣を泄らすべし。毎日須らく調氣補瀉、按摩導引を佳と爲す。康健を以て便ち常に然りと爲す勿れ」底の教訓に背いた天罰でもあらう。昨秋來再び健康を害して、今尙加療に専念中の始末だからである。是に於てか「轉ばぬ先の杖」敢て康健なる諸彦に對して、決して私の如き轍を履まれざるやう、更に瀧澤馬琴の「藥餌の效驗は小患の時に在り、老後の養生は弱冠の時に在り」の語を御進めんとする者である。

歐洲の方が漢藥は盛ん

市原 分

漢方藥といへるか否か門外漢の私には斷言出来ないが、今度歐米を一巡して見て、生藥、せんじ藥があちらで案外盛んに用ひられて居るのに一驚した次第である。佛蘭西では到る處の藥店でゲンノシヨロとかセンナとか其他の藥草を販賣してある丈で、余の歡迎に出席した一佛人は有名な藥學者であつたが「獨逸の藥は化學藥品であるから副作用があり劣等であるから佛蘭西の藥は生藥であるから人體に對して優秀である」と自慢して居たのである。又チエコのブラーハにて偶々中央廣場のメッセを見たのであるが、そのメッセに又生藥の非常に多いのに驚いたし又漢方藥は支那、日本等の專賣物といふ様に考へて居た頭が根本から覆へされたのである。我國で

もいつまでも歐米人の後に附居らず、漢方の如きも大いに研究普及して人類の幸福に資したきものである。

東亞醫學の發刊に際して

木村長久

日支事變の原因、經過は兎も角も、今日は日滿支三國相協力して鞏固なる協同體制を造り上げて行かねばならぬ時機になつた。此秋に於て醫學に課せられた役割は幾何のものであらうか。勿論政治經濟の如く、主流をなす問題ではない。然し醫學に携る者にとつては一大關心事であらねばならぬ。醫學に於ける日滿支三國の協力これは昔人に課せられた任務である。東亞醫學協會が組織された目的もそこにある。日本には日本の醫學、醫師があり、華國には華國の醫學、醫師がある。相互の學術の交換は切瑳琢磨によつて相互を發達せしめること甚大であると信ずる。現在の日本の醫學は大體に於て泰西醫學を承継し、同化して日本固有の醫學に變化しつゝある。而して一方には所謂漢方醫學の復興振頭がある。漢方醫學は嘗ては時代の潮流に押されて無批判的に棄て去られたものであるが、泰西醫學の同化が行れるに従つて反省されて、その優秀性が再認識されて來たのである。斯くして日本に於ける醫學の發達は東西の二大醫學の特長を綜合して日本固有の醫學を完成せんとするの方向に進んでゐる。これは日本に於けるのみならず各國の醫學も必然的にその方向を辿るものではあるまいか。

衛生防疫の向上を圖らねばならぬと考へられる。然らば泰西醫學の普及のために、在れば泰西醫學の壓迫、排撃すべきか。此點は深甚の考慮を拂はねばならぬと思ふ。中醫國醫の爲す所は一見野蠻的で非科學的に思はれるかも知れぬ。然し必ず何らかの優秀性を内在してゐるものと思ふ。その優秀性を泰西醫學の普及によつて顯出せしめ、發展せしむべく努力すべきではあるまいか。若し明治年間に於ける漢方の無批判的壓迫排撃を華國に於て繰返す様なきことがあつ

發刊を祝す

矢數 有道

日本と支那との漢方醫學の提携を希望する向きは、實は久しい以前からであつた。「漢方と漢藥」誌も既に彼地ではかなり多くの人から讀まれてゐたし、日本の漢方醫學やそれに関する記事が支那語に翻譯されたり出版されたりしてゐるものもある。たゞ、現在のわれ／＼漢方醫は彼れのこととは殆んど全く知つてゐない。また知らふともしなかつた。それには種々の事情もあつたであらうが、少くとも今日以後の人達はそうゆう態度をとることは許されないのである。漢方醫學の研究上のことに就ては勿論のことであるが、東亞皇道國家を創造すべき日華滿三國民の親善融和のためにも、是非ともなさねばならぬ事柄であることは贅言を俟つまでもあるまい。

或る識者はいふ「漢方醫學は日本に渡來して獨自の發達をとり上げて却て支那よりも遙かに進歩してゐる。彼は單に脈をとるのみで腹診術すらない始末だ」と。又或る人は云ふ、「さすがに支那は連綿三千年の傳統を有するだけであつてその醫術も頗る深遠だ」。自分は何れの説が正しいかどうかは知らない、——が今やそれをハッキリと正しく知らして呉れる時期が來たやうに思ふ。今回東亞醫學協會から機關誌「東亞醫學」が刊行されることになつたが、希くば本誌がいよ／＼發展して日華滿三國の融合親和のために偉大なる業績を發揮されんことを祈る次第である。

醫界の轉換期

矢數 道明

陸軍參謀本部の高島中佐が「日本百年戰爭宣言」なる旗幟を明かにして、今事變の所謂長期なる意味を明確ならしめたのは大膽にして率直、國民の覺悟を根底より不動ならしむるに、最も効果的であつた。然し乍らこの百年は決して數字的百ではなく、百年の大計の百であり、百年河清を待つ百である。吾むしる永遠の代名詞である。今事變を契期として、あらゆるものが東洋的に、あらゆるものが日本的に改修せられんとしてゐるの時、獨りわが醫學のみがその圏外に超然たり得ぬことは勿論であつて、明治維新以來最も西洋化せられたる我國の醫學は茲に大改修の必要に迫られてゐるといはねばならぬ。

日本の時とは如何の間に對して私は、我が國が所謂五行の中央土の位に在つて、一切の歸一と綜合統一の必然的使命能力を有する民族の理念の實現にあると答へたいのである。而して私はもうそろ／＼日本の醫學の成立を見てもよい頃と思ふ。否既にその實現の餘りに遲きを憾むものである。尙ほ吾人は大陸進出の文化的戰士としての醫人養成の急務を痛感するものであつて、その學則の第一にはこの中心歸一の原理を説く日本精神講座が設けらるべきであり、漢方醫學を經とし、西洋醫學を緯としたる教材が融和合致し、更に進んで限りなき創造の醫學大系を樹立すべきであると思ふ。

聞く處によれば當局の一部に於て高野山の布教師に速成灸點療法を教授して宣撫員となし、基督教徒中醫療的出力あるものを選んで大連へ進出せしめんとする計ありと云ふも、これは決して百年の大計に相應しき舉動ではあるまいと思ふ。吾人は我が國醫學界の轉換期に際して、日本百年戰爭體制に即應せる、日本の醫學學校創立の急務なることを提唱するものである。

全國の同志諸君憤起せよ!!

東亞醫學協會は成立日尙ほ淺き爲、各種の活動を活潑になす迄に至つて居ない。併し、全國會員諸氏が大きいハリ切つて、或は本部の活動を激勵され、或は目的達現の爲に献身的に奔走される等まことに涙ぐまじきものがある。その一般を披露すると共に、一日も早く協會の諸機能を充實し強力なる活動に進み度きことを念願する。

伸展工作は着々と

吉田 一郎

東亞醫學協會の伸展工作、折柄年頭末の爲、思ふ様に行きまじりでしたが概要左の通り、

(一) 奉天の滿洲醫大東亞醫學研究所へ小生發送名義の趣意書御發送下さい。何れこの件に關し連絡をとり度申します。

(二) 北支南支方面
(一) 北京東洋大藥房主系川氏と通信復
以上取急ぎ報告まで、
諸先生には小生の苦闘をよろしく御傳へ下され度努力と相當なる外交費を要し居ります。一夜の宴會にも金三十圓位計上致し居りますが、然しこれは小生の道樂故御看過結構にて東亞醫學興隆の爲となれば聊かなる犠牲であります。(埼玉)

醫藥制度調査會に陳情せよ

竹内 吉五郎

(前略) 支那現地へ救護隊を組織したる愛國有志の活動によりて、多大の業績を残したるは周知の處なるも、斯くの如き小規模のものなるも、本會にて多數の速成醫師を養成して送るの必要は歴然たり仄聞するに醫藥制度調査委員會にても現地醫養成の必要が論議せられたりとか、(中略) 小生は大坂選出代議士にして同調査委員たる井坂豐光先生に知音あり、先生を通じて醫師法第一條中に「漢方醫師」を加入する様運動するつもりなり。

(中略) 國民保健實施の曉は殆んど藥劑師の業務は必要なく、現在の藥種商にて事足るが如くなると考へらる。故に藥劑師を速成に養成して醫師とならしむる様計畫するはもつとも緊要と考へ候。(下略)(大阪)

感佩の至り

陸軍少將 渡邊 温行

今回、豫て企圖相成候、日支滿親善和平の爲に東亞醫學協會を設立相成り候事慶賀の至りに奉存候

會を組織する手筈になり居り候切に内地の諸賢の御後援を御願申上候。

刮目してその活動を待つ

臺中 吳文通

東亞醫學協會の成立は當地言論界にも偉大な反響を興へ、刮目して今後の活躍發展を期待して居る同封は臺灣新聞、臺灣日々新聞、邦新聞の記事の切抜です。御參考迄に送附致します。

漢醫問題は極めて重大

滿洲醫大 岡西 爲人

(前略) 東亞醫學協會御結成のこととは時節柄誠に有意義の御企てと存候その發展を念じ上居り候滿洲の漢醫問題も極めて重大に付民政部門にても對策考究のことと存候支那は一層スケールも大きく滿洲

中國にも敬服すべき著書多し

渡邊 像美

東亞醫學協會御設立日華親善提携の最急務と佩服し、謹しんで其の擴大を希望奉り候。(中略) 御承知の通り彼地には中々研究致し事變前の著書敬服すべき者不少と存候。時代は近古に屬し候へども例の趙學敏の串雅等拍案嘆稱の條多しと存候御高見如何。

應分の努力を惜しまず

代田 文誌

一月二十九日、夜日比谷松本樓に於て、東邦醫學社主催の下に漢方醫學關係者の新年宴會が開催され、各方面よりの出席者三十數名に及び、この種會合としては稀に見る盛會であつた。即ち會合は日本漢方醫學會、日本醫學研究會、東亞醫學協會、東邦醫學社、日本鍼灸協會其他諸團體の代表者が一堂に會合し、東亞新時代を指導すべき東洋独自の醫學體系を協力一致大同團結して大成せんとする熱誠に燃え、各自の抱負經驗を發表し合つて頗る意義深きものがあつた。東洋醫學の將來の爲まことに祝福すべき集りと言はねばならぬ。

第三回 漢方醫學講座開講豫告

期間 自昭和十四年四月五日至昭和十四年十月三十日
場所 東京市小石川區茗荷谷町三二 拓殖大學
聽講希望ノ者ハ三錢切手封入庶務課規程書請求アレ

拓殖大學漢方醫學講座

電話大塚(86) 一三〇番、六七三〇番

學に關する研究文獻多量に御念賜下され深く御禮申上候。朝鮮に於ては目下東洋醫道會の南拜山翁御出になり、明日京城の東西醫學研究會主催となり東洋醫學大講演會を開催し、日支鮮の學者演士を動員することに居り候同時に朝鮮に於ては京城に之に關する期成の漢醫問題が解決出來ざる様では支那など思ひも及ばざることと存候。當方に於ては各種の資料を蒐めて私案を定め、幾分かにも貢獻仕り度と存じ居り候。拜領の御著書若し餘分有之候へば左記に御寄贈下されば好都合かと存じ候支那にも相當知人も有之候追々連絡恢復することと存じ候

猪野毛代議士と會見

一月二十六日、本協會理事大塚敬節、矢數道明、矢數有道三氏、及役員龜田貞氏は、打連れて代議士猪野毛利榮氏宅を訪問漢方醫學振興に關する國家的對策につき種々懇談する所があつた。附記 右の如く協會の活動も漸く活潑になつて参りましたこの活動の發展を大いに御期待下さい。

中國漢方醫界の現況 と日華提携に就て(一)

大塚 敬節

私は昨年の三月に日本漢方醫學會の機關誌『漢方と漢藥』の誌上に中華民國に於ける國醫學界を見る一文を掲載し、かの國に於ける國醫學界即ち吾々の謂ふ所の漢方醫學界の現況を紹介し、且つその動向を批判し相互に提携して漢方醫學の研究に邁進すべき所以を力説致しました。然るに昨年五月即ち事變直前に北平から出版されました『明日醫學』なる雑誌には、中華民國國醫學界見なる題下に金真如なる人が私の小論を翻譯し、且つ此に批評を加へました。さきの私の論文はその後數回にわたつて『漢方と漢藥』誌上に連載する豫定でありました。『明日醫學』に現れた批評への挨拶を致す覚悟でありましたが、偶々日支事變の勃發がありまして一時中止の已むなきに至りました。しかし乍ら、今次の事變によりまして、吾々の同志は或は軍醫として、或は藥劑官として、或は一兵卒として、或は部隊長として相繼いで、彼の地に向つて出發致しました。而して此等の同志が吾々にもたらす音信は、漢方醫學による日華の提携こそ、政策上の衝突や、利權の得失を離れたる最も手近で、而かも最も適切な方法であることを確信せしめるに至つたのであります。

一昨年の拓殖大學の漢方醫學講座の修了者の一人である中島官男君の如きは目下藥劑官として、北支に活躍してゐますが、同君は彼の地に於て、漢方醫家の團體に入し、同君が他の地方に移動する

手紙を出しまして、御卒業後は上京して漢方醫學の發展のために盡力してほしいと懇願しました。ところが同君からの返事には、自分も將來は漢方醫學の研鑽に一身を捧げる覚悟ではあるが、陸軍の依託生としての自分は軍醫として働かねばならない義務があるから、今直ちに御希望に副ひかねると申して参りました。卒業後同君は熊本の聯隊に數ヶ月を送つて、その後上京して参りました。上京後は牛込喜久井町に下宿しました關係上、私の宅へも、よく遊びに参りました。昨年の夏、應召されて参りました。向ふでは暇があれば大いに漢方を研究し、凱旋の時には漢方の書物をどつさり御土産に持参して参りますと云つて出かけた。然るに南京攻略戦に参加した不幸病魔に侵され、本年の二月一日に、野戰病院で死去されたのであります。後には父君と唯一人の令妹とが残つてゐられる等でありました。私は同君が死去したことを聞かされた當時は、大事な玉を海の底に取り落した様でありました。しかし乍ら、いつまでも悲しむてゐる時ではありません。今こそ立ち上らねばならない。漢方醫學によつて日華兩國が相提携相融和して、東洋永遠の平和の一つの勝劑を果すことが出来るならば、一君の死も亦大いに意義のあるものになりませう。私はそんなことを考へたのであります。

さて、話が少し脱線致しましたが、私は茲で、順序として中華民國に於ける漢方醫學の勢力の侮り難いものであることをお話し致さねばなりません。(以下次號)

政治部役員は會員吉田一郎、龜田貞兩氏に依頼することに決定せり。

政治部役員は會員吉田一郎、龜田貞兩氏に依頼することに決定せり。

鍼灸醫學を語る

柳谷 素靈

鍼灸醫術は漢方醫學の重要な構成要素である。古人も既に言へるが如く「藥せず鍼灸せず、鍼灸して藥せざるはこれ良醫に非ず」と寔に考ふべきの言と言ふべきである。

我日本に於いては明治初年の漢方醫學に醫育の基調を置かず、洋風に準ずるに至るまで、實際醫療の方法は之の鍼灸藥の三方によつて行はれてゐたのであつた。

鍼灸醫術の起源は印度、支那、日本のどれかであると言ふ學說若し主張が各々の史料や據點のうへから説かれてはゐるが、そのいつれの場合にありても東洋人の頭から考へ出され、東洋人の手によつてつちがはれ發展され來つたと云ふことには間違ひの無いところである。

然も古來幾多の諸條件の變化にも拘はらず、悠久今に至るまで一貫して滅せず、絶せず脈々として生命あるは種々なる理由もあるであらうが、その構成内容に臨牀的價値を見落してはならぬと考ふるものである。

實際現今猶ほ治療に鍼灸を役立たしめてゐるものは支那と日本である。然し必ずしもその運用の手法

東亞醫學協會二月例會

二月十一日午後六時半より

一、日時

一、場所 小石川區若荷谷町三三拓殖大學

一、講演 蟲様突起炎に對する大黃牡丹皮湯の適應症
素問を如何に活用すべきか

一、會場費 金三十錢當日持參のこと

當日は猶先哲醫家慰靈祭及び拓殖大學漢方醫學講座同窓會をも併せて行ふ。

龍野 一 雄氏
矢數 有 道氏

祝發刊

東和漢藥製劑所
東京市淀橋區百人町三ノ三〇一

紀伊國屋藥店

東京市神田區花房町二萬世橋際

高島堂藥局

東京市本郷區本郷五ノ五赤門前

東和漢藥製劑所

東京市淀橋區百人町三ノ三〇一

紀伊國屋藥店

東京市神田區花房町二萬世橋際

高島堂藥局

東京市本郷區本郷五ノ五赤門前

蟲様突起炎の話(一)

龍野一雄

緒言—歴史的事項—解剖、組織—生理—病因—病理解剖—症狀—診斷—療法

どんな病氣でもそれが稀にしか見られぬものか、若くは容易に治つてしまふやうなものか、その社會的意義は極めて寡いものであるが、それに反して例へば結核のやうにひとり罹患者が多いのみならず、生命を脅かす懼れのあるものにあつては重大な社會性を帯びて來ることは詳言するまでもない。

蟲様突起炎の如きもその一つであつて、まかり間違へば生命を脅かすのは勿論、一般勤勞階級の家計を強震せしめることも亦一方でない。

久保田萬太郎氏の小説「花冷え」は發病後數時間で斃れた蟲様突起炎患者の死をめぐる内容であり、小説「ひとりりしづか」の女主人公の父親も盲腸炎で死んだといふことになつてゐる。いやさういふ文學ばかりでなく現實に於て横綱玉錦や女劍劇の大江美智子の死などひし／＼と世人の胸を打つ幾多の例が相踵いで報道され、蟲様突起炎恐怖症と呼びたい位の者さへ屢々遭遇する有様である。

蟲様突起炎による死亡率は、昭和九年度内閣統計調査によると全國で二六〇九名即ち死亡者一萬人に對し〇・三八%を占めてゐるといふから、實數の罹患者が一才想像しきれない程多いことが知られやう。

明治三十三年に東大の近藤外科では八名の蟲様突起炎患者が入院

した。明治四十四年は三三名に増し、大正十五年には七八名となり昭和十年には實に二三八名の多きに達し、最近十年間に七倍になつた譯だ。この傾向は私の母校慶大に於ても同様で、茂木教授の宿題報告によると大正十年に入院患者七十七名だつたものが五年後の大正十五年には二九五名となり、それから十年後の昭和十一年には六〇二名に激増してゐる。即ち最近五年間に八倍の飛躍ぶりである。

この事は蟲様突起炎にかゝる者が多くなつたばかりでなく、一つには世人の注意と、手術に對する理解とによつて外科醫の許に送られるのが餘計になつたことを最も雄辯に物語つてゐると思ふ。

私のやうに内科的に治療してゐる一開業醫の所ですら、昨年六月中旬から十二月末までに一一四名の蟲様突起炎患者があり、此外に本病の疑ひを以て來院した人も相當に及んでゐるから、世人の本病に對する關心の深さを知るに餘りありといふべきであらう。

斯様に年々増加する一方の蟲様突起炎によつて個人の蒙る肉體的、精神的、經濟的の苦痛は云ふに及ばず、國家的に見て有形無形の損失を總計するならば驚嘆すべき數値を得られるであらう。

我々が醫者として將又一社會人として本病の重大性を思はざるを得ない所以に實に上記の諸點に懸つて在るのである。

觀の態である。外科がメスの及ぶ範圍を出来るだけ擴充して行くのは本來の使命だが、それと全く同じ意味に於て内科的療法の研究も亦ゆるがせにすべきではない。今日の内科が消極的態度を持してゐるのに反し、我々の甚だ乏しい經驗に於てすら蟲様突起炎に對する漢方療法は、その治療成績の優秀なる點に於て、將又短時日に治癒し従つて患者の經濟的負擔の輕き點に於て、他の追従を許さざるものがあるが故に、漢方の研究を益々盛大且つ精密ならしめて日本の醫學に貢獻せんことを強調する次第である。

歴史的事項

蟲様突起炎の本態が知れて來たのは今から四十年足らずのことである。それまでは糞便が盲腸に滯積するたれに起るといふ考へから糞便性盲腸炎と稱してゐた。一八八六年(明治十九年)に米國のフイツツ等が蟲様突起の炎なることを見出してからはじめて蟲様突起炎と呼ばれるやうになつた。

日本で最初に手術を行つたのは明治三十三年近藤次繁先生であつた。その翌年に北川、山形兩博士が外科學會の宿題を擔當されたが昭和十二年には恩師茂木博士が精査に至らざるなき宿題報告をされたのに比して全く隔世の感がある。

蟲様突起炎の外に別に眞の盲腸炎の存在することも近年知られて來たが、世間では依然として蟲様突起炎を盲腸炎と通稱してゐるのは舊説の傳統なるのみならず言ひ易い點も大いに與つてゐる。

骨盤結締織炎も時に結核性腹膜炎も包括されてゐるが、その内でも蟲様突起炎が代表的なものである。

戰陣日誌

北支〇〇軍藥劑少尉 中島宣男

××日 なんだかやを寒い空合ださうだもう十一月だ。内地もさぞ寒いことだらう。壹州滋養縣について今日で三日目、漢方の名醫をとん掛けて居る自分の願がとげられて張球安先生がある

××日 進發にならぬうちにと思ひ乍ら業務の方が忙しく、漸く今日總氏を尋ねることが出来た。あやしげな筆談にて診察を見學させて欲しいと來意をいへば、うす笑ひをうかべてよろしいといふのが、奇聲を發するとしか思へない。

患者を小さい手枕に交互に兩手をのせさせて脈診をする。この間約五分位それでおしまひだ。アレでわかつたのかしらといふ。かゝるいふかゝるは自分丈で先生も患者も至極太平に至極満足して居る。持參した康平傷寒論と類聚方廣義を出して見せた處

「好々的々々々」と涎を流さん許りに嘆稱して居た。もつとも此の二書は濟南でも天津でも既に試験済みのもので、見せて浦山敷がらせるのは自分の戦地に於けるひそかなる楽しみになつて居る。「日本漢醫の芳名を知らせて下さい」といふ書いた文字を忘れて仕舞つて殘念、覺えておけばよかつたつけ。知り度いのも尤もと紹介したところ、歸りを送つて云ふに、私は滋養縣の中醫代表であるが、今後日華兩國は漢方醫學を通じて堅く提携して行かなければならぬ、と顔を赤くして力んで居た。

××日 隊の大木一等兵が腹痛だといふ。小建中湯を與ふ。
××日 小開を見て張氏をたづね寸診察して下され」といふ、駄目だといつてもきかないので、拓大漢方講座仕込みの胸を見せ「やれ」と糞度胸を出して、腹を出させる、言葉が通じないのをやつとの思ひで腹を出させ、一診するに、大塚先生の人參湯證が歴然としてゐるのでほととして人參湯をあたへる。
××日 昨日の人參湯が大變よく効いたと禮に來て、何遍も組んだ手をあげたり下げたりして居る。目先にもらつて居るさくなる。外のもは行かぬ。隊のものが自分をつかまへては「シーサン／＼」と云つて組んだ手をあげおろしする。
××日 あれから張先生にも大分御無沙汰して居た處、便をよこして恐る／＼いふことに、桃東生、唐毓堯、馬崇璋、王鳩九、外十人許りの中醫と佛教社の幹部を集めたから先生御出席下されて頂き度いと云ふ、部隊長殿にきくと「よし行つて來い」と云はれたので出陣。多少日本語出來る人もあるが、十餘人の人々と筆談するのは仲々ツシムの疲れる仕事である。承瀧倉なる人の中華語譯した湯本先生の眞漢醫學を出して見せたりした。かうなると煙たい様な優越感がなくもない。以上

<p>祝發刊</p> <p>漢方醫藥</p> <p>松鶴堂</p> <p>東京市下谷區 上車坂町一</p>	<p>和漢藥種問屋</p> <p>金子仁生堂</p> <p>東京市外 武藏塚驛前</p>	<p>醫器部</p> <p>半田屋</p> <p>東京市本郷區 春木町二丁目角</p>	<p>漢方醫書</p> <p>本草書</p> <p>井上書店</p> <p>東京市 帝國大學正門前</p>
---	--	---	---

東亞醫學協會 發會式開會之辭

矢數道明

本日は日獨伊防共協定第一回の記念日に當つて居りまして、この國際的に意義のある日に、多數諸賢の御來場を得て、吾が東亞醫學協會が成立し、漢方醫學を通じて日獨伊防共協定に努らぬ、日華滿三國の文化提携を實行して行くことになりましむることは、本協會の深く喜びとする處であります。

日支事變は蔣介石政権といふ人形を巧みに、影の人形遣ひが我が東亞の天地より退却する迄繼續されねばならないので、必然的に長期の抗戰、長期の建設とならざるを得ないのであります。新東亞建設の目的達成に三つの方法があつて、その一つは人形を早く覆滅せしむる方法、その二は人形遣ひを徹底的に驅逐する方法、第三は中國をして人形遣ひの陰謀を自覺させ、東亞の新時代創造の民族の自覺を呼び起させることであつて、この第三の方法は主として文化的聖業に屬すべきものであらうと思ふのであります。戰國策に蚌鶴の争ひは漁夫の得る處となるといふことがあります。日華は本來の面目に歸つて相提携して、新東亞の建設に邁進せねばならないのであります。漁夫の計略を早く自覺せねばならないのであります。併而文化提携の中、最も捷徑であり、具體的事實を速座に現實化するものは醫學であります。醫學仁術は國境を超越し、戰爭中に在てすら敵味方を超越する。而して東亞の新時代を指導すべき醫學は仰くまでその本質精神を東洋に置かなければならないと思ふのであ

東亞醫學協會 各部主任決定

- 一、圖書部主任 石原 保秀
- 一、出版部主任 大塚 敬節
- 一、庶務部主任 矢數 道明
- 一、總務部主任 柳谷 素雄

出版部役員決定

出版部には「東亞醫學」編輯主幹として、會員小柳賢一氏が就任した。同氏は第一回拓大講座終了者である。

拓大講座教材 贈呈

- 一、滿洲醫科大學、東亞醫學研究所 岡西 爲人氏
- 一、京城醫科大學藥理學教室 石戸谷 勉氏
- 一、ハルビン醫科大學長 趙 國 仁氏
- 一、奉天三經路南口會春堂後院 蕭 毓 麟氏
- 一、奉天鐘樓南德潤堂藥局 內漢藥成方委員會
- 一、北京大學總長 湯 爾 和氏
- 一、ハルビン醫學專門學校長 閻 德 潤氏

一月度理事會

一月度理事會は一月廿日夜開き豫告の如く、二月十一日協會例會開催の件其他を決定した。

漢方専門科名の 確立を

漢方専門科名確立を！とは久しい間の翹望であるが、愈々政治

東亞醫學協會々則

- 一、名稱 本協會は東亞醫學協會と稱す
- 一、目的 本協會は日華滿三國に於ける東亞醫學の交禮研究をなし、相互の親善交友を緊密ならしめ、進んで東洋文化の振興を圖り、以て東亞永遠の平和確立の爲めに貢献せんとす。
- 一、事業 本會は目的達成のため左の事業を行ふ
 - 一、機關誌『東亞醫學』の刊行
 - 一、各國に於ける機關雜誌の交換
 - 一、各國に於ける著書論文の交換
 - 一、各國に於ける優良藥品の交換
 - 一、研究生視察團の遊學交換
 - 一、漢方病院の設立、漢方圖書館の設立、和漢藥研究所、漢方醫學教育機關等の設立
 - 一、其他の目的達成に必要と認むる諸事業

拓大漢方醫學講座 第二期會報告

卒業後の第一回の例會を十一月九日午後六時小石川傳通會館に於て開催す。

出席者二十四名、矢數道明先生、大塚敬節先生にも御多忙の時間を割き特に御臨席賜り、卒業後の勉學方法に就て有益なる講話を拜聴する。一時間にして兩先生御退席

會計部報告

一、百五拾圓也 拓大漢方醫學座

一、參百五拾圓也 拓大漢方醫學講座講師は各自金五拾圓宛贈金して 本協會基金に寄附せり。

附記 本協會の活動を有効活潑ならしむる爲有志の御寄附を歓迎致します。

祝發刊

漢方と漢藥

日本漢方醫學會

祝發刊

南 山 堂 書 店

町岡龍區郷本市京東

祝 發 刊

三共製藥株式會社

株式會社

中村龍商店

株式會社

鳥井商店

南江堂書店

春陽堂書店

會員消息

○會館行學苑第二回修了者大村久雄氏は軍醫見習士官として目下南支派遣軍安藤部隊○部隊○隊に在り御健闘中今春通信を得たり。

○會員借行學苑第一回修了者鍼灸家柿木良治氏は昨年五月應召馬鞍山の攻撃にて名譽の戦傷を受け目下郷里鹿兒島縣薩摩郡高城村湯の元にて専ら療養中なり。

○會員拓大講座第一回修了者久保田光茂氏は昨年八月軍醫中尉として應召目下北支派遣軍鷲津部隊○部隊○隊本部にて防疫、傷病治療に活躍されつゝあり。

○會員拓大講座第一回修了者中島宣男氏は、藥劑少尉として一昨年應召、既に約一ヶ年間に互り濟南、徐州埠、南京等中北支各地を轉戦赫々の功を樹立されて居られたが、本誌に對しても六面發表の如き玉稿を寄せられ中國民衆と漢方によりて提携す新東亞建設の實際的仕事に踏出して居られるはまことに感謝の至りなり。少尉は目下北支派遣軍○部隊本部にて活躍されつゝあり。

以上征戰諸氏の武運と御健康を祈るや切なり。

村博士は學理實際共に衛生學の泰斗、只願はくば新東亞建設の現段階に於て、中華民衆の心を失ふが如き拙策をとること勿れ。

× 東朝紙曰く、ゲンノシヨウコ其他の藥草を日本藥局方に收載の準備中なり。

山梨縣經濟部にては、厚生省の依頼により、ゲンノシヨウコ、ドクダミ、センブリ其他數種の藥草を農民に採集せしめて發送せり。仄聞するに今十四年度は、厚生省に於ては全國にわたり相當多量の藥草を採集せしめて購入の方針なり。

メモ

東亞醫學協會發會式は左記のジャーナルによりニュースとして取扱はる。

都新聞、中外商業新報、東京日日新聞、北海藥報、藥業新報等なり。外に漢方と漢藥又多大のスペースを割く。

× 興亞院文科部長は曲折の後千葉醫大教授醫博松村壽氏に決定、松

編輯後記

「東亞醫學」漸く日の光を浴び本日お手許へ差上ります。編輯者不馴れの爲、出来栄甚だ悪く、恐縮致します。今後大いに努力するつもりであります。皆様にも何卒御叱正御高助を惜しみなく御與へ下さる様先以てお願い致します。

一月十六日朝鮮日報によれば、朝鮮に於ける代表的漢醫二十餘名集合東洋醫學復興會を組織して、種々討論研究の後、漢方醫學專門學校、漢方病院の設立等を議決せりと。

× 國民新聞の報ずる處によれば、二十五日東北帝大醫學部にては中央講堂にて東亞仁和會を結成、東亞大陸の醫學的研究と全醫學徒に對し大陸進出を勸奨すと。

興亞院文科部長松村博士は二十一日より上海の文科施設を視察したる結果上海に醫科大學設立の立案に着手せりと。

各地でなされた、それ等の研究普及の運動はなるべく速に、なるべく詳細に本誌にレポートして下さい。編輯部にさうしたレポートの洪水を溢れさせることによつて第一には中央に於ける活動に拍車をかけて、重い腰を軽くし、フラッシュをもしつかり踏張らせませう。第二には本誌の行渡る全範圍に於ける活潑なる活動が存し、併もその運動が集中的に本誌に反映することにより、一方には同志相互の策勵になると共に、東亞醫學協會の目的活動を多數マニアの寢言としか受取らない外部の短見者流を醒覺せしめ、東亞醫學漢方醫學なるものが、公民権を法制上も又醫學界にも、當然要求すべき嫡出子であるといふことを認識せしめることが出来るでせう。

拓殖大學漢方醫學講座、四面廣告の如く、來る四月一日より開講されると第五回になります。五ヶ年の歴史ある日本で唯一の權威ある漢方醫學の傳習機關であります。讀者各位に諸方に御吹聴、この講座の本格的發展に御寄與下さることを希望致します。殊に、日華の文化提携を醫術によりてなさんとする向、或は、漢方醫學などは時代後れで云々等の議論を立て、居られる向は是非とも一度同講座に參して漢方醫學とは如何なるものかを知つて頂き度い。知る義務があると思ひます。

(八)

陸軍中將、下瀨謙太郎氏、醫事公論に於て「對支醫療方策私見」なる一大論文を發表せられ漢方醫學不要論をのべられたる後に曰く「それと關係があるや否やは知らぬが、これ等漢方醫家が新支那との提携に乘出し、漢方醫學の建設とか漢方醫院の經營とかに熱中しあるやに聞かぬ。漢方醫家の立場は愛國の熱情から出發したものであらうが、廣く我國の立場から考へると、時勢に適せずして廢止になつた漢方醫學を以て、本家本元の支那に秋波を送るといふは如何であらうか」と論じて居れる。

我等は敢へて支那に秋波を送らんとするものではない。中將の言は東亞協同體の建設といふ現在の段階に於て、我等が考へ行はんとし居ることに對しても、又漢方醫學の眞實に對する認識といふ點に於ても些かピンとを外れて居る様です。

板垣陸軍大將興亞議會の劈頭戰況を説明し、今後の我對策の基準を斷じて曰く「大策戰の終結せる今後こそこれ等武裝民衆によるゲリラ戰を敢行して我後方擾亂を策することと判斷せられる、従つて帝國としては今後の建設上民衆の獲得、民心の把握を必要とするのであつて、本事變の今後は實に民衆の獲得戰と稱するも過言ではありませぬ(讀賣)」。

× 我等は漢方醫學の持つ缺點に對しても、閉眼塞耳してゐるものではない。

× 東亞醫學協會第二回例會も五面に公告の通り二月十一日に開催致されます。時日が大方ありますがお忘のない様御出席を希望致します。

× 誌代は成可く一ヶ年分纏めて御納入願ひます。

× 興亞院文科部長は曲折の後千葉醫大教授醫博松村壽氏に決定、松